感激の外はない、私共は嬉し泣きであった。
遺骨も十一月廿日到着、盛大なる村葬が行われた、
かくしてそれから早一年は夢の様。只有し日の思ひを浮かべて今日の日になった。
田原隊長殿（※6）は御戦傷にも拘わらず、一周忌に當り御
慰問や御供物を御贈呈、又、わざ〳〵思ひ出の旭川で
御法要を催され、遺族の私共に、手厚く戦況を報
告され、今更乍ら隊長殿の御厚情に感謝したのであった。

遺書

今、週番士官の命にて私物の整理が始まる。兵器が
あたる。軍装がはじまる。
武士のならわし（初陣）
姉様　万一のことあるもよろこんで下さい。立派にやります
笑われずに　せめてもの恩返し
二十四才の今日まで姉様に…　心から生死の境で感謝
す。行先はたしか（ノモンハン）
今朝飛行隊が動員でいった。
姉様　皆様の永遠の健康を祈って、弘子、郁子、良子、繁雄、笙子を大切に、
では、自分もこれから準備す、
さようなら

田郎

寫眞を入れておく
母上によろしく　目を大切にしてくださるよう、
日の丸の旗を　きつと　きつと身体につけて行きます。

経歴

大正五年二月九日　新十津川村に出生
昭和十年三月　瀧川中學校（現 道立滝川工業高校）卒業
昭和十年四月　明治大学専門部入学
昭和十三年十二月十日　在学中に入營
昭和十四年八月二十九日　ノモンハンにて戦死

弟　田郎の一周忌

北海道樺戸郡新十津川村
姉　三田村ふみ

忘れもせぬ昭和一三年一二月一〇日　旭川第二十七聯隊（※1）に
入営、直ちに十五日出征である、瀧川駅通過の報で取るものも
取敢へず見送ったのは夜の六時〇分、初の軍服姿、
掟に従って素直に車中から首さへ出さず唯嬉しいやら、懐
かしいやらで踊る心を顔全体で現はして、早口に見送って下さる
方々に別れの言葉も忙しく……　かくして三十分の停車
も短いものであった、　後輩の中學生（※2）の校歌・拍子・檄…
など餘りにもはでな門出であった、
発車のベル…「萬歳！」「萬歳！」
「さようなら！　しっかりやって来て…」
「姉さん！　お母様頼みますよ」
まさか、これが此の世の別れの言葉にならうとは露知らず、
田郎は女五人姉妹の一番末に男として生れ、八才にして父を
失ひ、二十三才のその日まで女手で専門学校（※3）まで育て上
げられ、今の今まで母や姉の有難さをかくまでに感じて
ゐなかったであろうに、君（※4）に召されて行くに際し、始めて強
く身にしみたことであらう、
嫩江（※5）入隊以後も一度も苦しいこと、つらいことこぼして來た
事はない、寒い冬、暑い夏も過ぎて一息せんとする時、
動員の命を受けたとの報…　でも何時出動することやら
兵卒には知る間もないか　故郷の私共には唯々神佛に念
じてこれ三生よく病に丈は負けぬ様に…
あ…思い出すさへ感激の夜、村祭りの宵祭、
午後七時…
役場の兵事係来宅
でも、何も言われぬ只世間話
時経て形を改め「…実は　田郎さんが今度　名
誉の御戦死をなさいました…」と公電を出される、
私共餘りの事に涙も出ぬ、まだ出動したかさへ知らぬ
私共であったのに…　でも…
「田ちゃん、よくやってくれたね、御奉公が出来て…
さぞご先祖も父上も御満足なさってゐることでせう…」
生を得て二十四年、入隊僅か九ヶ月、一等兵になり、
飯上當番もせずともよくなったと知らせて来て二ヶ月足らずで…
母は士族の家を立派についでくれたと申て嬉し泣き。
色々と身に餘る遺族への御待遇や御同情、唯々感謝、

※1　旭川第7師団歩兵第27連隊第3大隊第9中隊に所属していた。
※2　昭和10年3月　瀧川中學校（現 道立滝川工業高校）卒業
※3　昭和11年4月　明治大学専門部商科入学。同窓生に村山富市氏、丸谷金保氏
※4　天皇
※5　嫩江（のんこう）のんこう。アムール川水流域の都市。日本陸軍の駐屯地があった。
※6　第3大隊を指揮した田原恒春少佐